

バレー部の「お母さん」

三重県 度会中学校 1年 田畑 真映

今年の春、私が入部したバレー部には、「お母さん」と呼ばれている人がいる。お母さんといっても、私より1学年上の先輩だ。その先輩は、おっとりしていて、どちらかといえば物静かな人だ。しかし、部員の誰かがけがをしたら、大きな声で、

「ちょっと待ってて。」

と言って、一目散に救急箱を持ってきて、けがした人にかけて寄る。私が突き指をしたときも、

「突き指は早く手当しないと、治療が長引くから。」

と言って、慣れた手つきでテーピングしてくれた。また別の日には、自分の爪でもう片方の手を切ってしまったことがあった。けがに対して無頓着な私は、気にせず練習し続けていた。少しすると血がたくさん出てきて、ボールが血で染まってしまった。それに気づいたその先輩は、救急箱を持ってきて血を拭いて消毒をし、ばんそうこうを貼ってくれた。本当に感謝の気持ちがこみ上げてきて、けがをしないように気をつけなければという気持ちになる。

その先輩は、部員みんなの救護をしてくれるから、一日に何度も走り回って助けてくれるときもある。マネージャーでもない、れっきとしたセッターポジションの選手だ。先生に頼まれて、みんなの救護をしているのかなあと最初は思っていたけど、実際は、いつの間にか自主的にしているとのことだ。救急箱も本人の「マイ救急箱」だそうだ。その先輩は中心で活躍している選手で、自分のことだけでも大変なのに、部員全員に気をつけてくれるなんてすごいなあと思った。

その先輩の親切はそれだけではない。その先輩は、部活にいつもタオルを2枚持ってきている。1枚は自分用、もう1枚は部員の誰かが忘れたときに貸すためだ。

それで毎日このように親切にしてくれる先輩をみんなは、

「ありがとう、お母さん」

と、つい言ってしまう。

母の日には、「お母さん」先輩にほかの先輩たちが、日頃の感謝の品をプレゼントされていた。「お母さん」先輩は、

「お母さんじゃないけど……、ありがとう。」

と、はにかみながらも嬉しそうにしていた。本当にとっても親切な「お母さん」先輩に感謝の気持ちがわく。そして、すてきで尊敬する。

でも来年、先輩が部活を引退されたあと、困ることがたくさんあるだろう。私はその先輩のようにセッターのポジションの選手になりたいと思っている。それと、「お母さん」のような先輩になりたいとも。そして、先輩が引退するとき、「安心してください。引き継いで頑張ります」と、親切のバトンを受け取りたい。